



これまでの出会いから学んだこと

日本薬科大学の大室智史先生からバトンを受け取り、今月号のエッセイを執筆することになりました。安田女子大学の川畑公平と申します。このようなエッセイを書く機会は初めてですので、自己紹介も兼ねて、私の研究経歴や大切にしている出会いを振り返ってみたいと思います。

鹿児島県の高校を卒業後に広島大学薬学部に入學し、大学3年生の秋に太田茂教授（現和歌山県立医科大学教授）の研究室に配属されました。薬物代謝や神経毒性を主に研究対象としているラボでしたが、卒業研究のテーマは広島県東広島市を流れる黒瀬川の医薬品汚染調査と水環境中医薬品の挙動評価でした。極めて少数派のグループであり、同級生が先輩方と活発に議論をする姿を横目に実験をしていたのですが、このときに培った液体クロマトグラフィー（LC）や質量分析（LC-MS/MS）のスキルが現在の研究基盤となっているのは感慨深いものがあります。太田教授からは本当に多くのことを学び、特に、“木を見て森を見ず”ならぬ“木を見て森を見る”ような視点を持つことを（なかなかうまくいきませんが）今でも心掛けています。

修士課程を修了後に城西大学薬学部の助手となり、工藤なをみ教授の主宰する研究室の運営をサポートしつつ、博士号取得のために研究に尽力する日々を送りました。脂質代謝に関する研究を行っているラボでしたので、着任後は未知との遭遇の連発でした（ラット・マウスの飼育・解剖やガスクロマトグラフィーでの脂質分析、遺伝子・タンパク質の発現評価など）。生命現象の解明は非常に興味深く、生化学の教科書や学術論文を片手に、肥満や糖尿病のモデルラットの組織を分析試料として得られた結果を考察するのはとても勉強になりました。従来からの研究手法の変化は自分の研究対象を大きく広げ、かつ工藤教授の研究に対する真摯さや熱意は学位取得の原動力だったと思います。

学位取得後に安田女子大学薬学部の助教に着任し、私を日本分析化学会へと導いてくださった西博行教授との出会いに至ります。カラム選択や移動相の検討など、分析をツールとして扱ってきた私にはあまり馴染みのなかったことでしたが、西教授から分析の教員としてしっかり検討しなさいと言われたのが最初の指導でした。学会に参加してみると、良好な分離の取得や分析時間との短縮など、地道な検討の繰り返しの上に成り立つものを

目の当たりにし、自分のすべきことを認識することができました。また、同学の徳村彰教授の指導の下、現在のメインテーマであるリゾリン脂質ならびに関連物質の分析法の開発に着手しております。リゾリン脂質の高精度かつ高感度な分析法を構築し、生命現象や病態の原因の解明に寄与できればと考えています。

これまでの研究生生活を振り返ると、多くの先生方との出会いが今の自分の根幹となっていると改めて感じています。研究に対する考え方や手法はもちろんなのですが、キャリアの先輩として今でも大切なことを教えていただけます。これからも新たな出会いを大切に、それを自分の成長の糧にしていこうと思います。

話が変わるのですが、私の趣味はプロ野球観戦です（妻との出会いを機にベイスターズのファンになりました…）。熱心に応援をする妻の影響を受け、今では家族観戦に加えて1人でも野球場に行くようになりましたが、これも出会いのおかげでしょう。2024年はベイスターズが日本シリーズで優勝し、26年ぶりの快挙を成し遂げました。セントラルリーグ3位のベイスターズが快進撃を続け、下剋上を果たすというサクセスストーリーにとっても感銘を受けました。クライマックスシリーズ進出をあきらめず、日本シリーズ出場をあきらめず、そして日本シリーズ優勝をあきらめない、そして2連敗後に4連勝で優勝しました。自分たちの成功を疑わず、そのためにできる最大限のことをやろうという、簡単そうで難しいことをやってのけた監督・選手たちに敬意を表するとともに、私もそういう人間でいたいと思わせてくれました。研究に通ずるものでもあり、局面ごとに目標をしっかりと立て、それを遂行するために最大限の努力をすることの大切さを教わりました。広島に住みながらのベイスターズファンというのは肩身の狭いものですが、ベイスターズと出会えてよかったと心から思います。ベイスターズに出会ってくれた妻にも感謝します。

さて、次号のエッセイは名城大学薬学部の杉山栄二先生に依頼しました。杉山先生とは本学会やクロマトグラフィー科学会でご一緒することが多く、お会いするたびに楽しくお話しさせていただいています。先生との出会いも私にとっては大切なものです。大変ご多忙中、快くお引き受けいただきありがとうございます。

〔安田女子大学 川畑 公平〕